

## 令和四年度前期日程入学試験学力検査問題

### 国語

文学部・教育学部・法学部・経済学部(文系)

令和四年二月二十五日 十三時三十分～十六時(一五〇分)

#### 注意事項

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子、解答用紙を開いてはいけない。
- 二、この問題冊子は、二十四ページである。問題冊子の白紙のページや問題の余白は草案のために使用してよい。なお、ページの脱落、印刷不鮮明の箇所などがあつた場合には申し出ること。
- 三、解答は、必ず黒鉛筆(シャープペンシルも可)で記入し、ボールペン・万年筆などを使用してはいけない。
- 四、解答用紙の受験記号番号欄(一枚につき二か所)には、忘れずに受験票と同じ受験記号番号をはっきりと判読できるように記入すること。
- 五、解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入すること。各問とも解答の指定字数には句読点・括弧等を含む。
- 六、解答用紙を持ち帰ってはいけない。
- 七、試験終了後、この問題冊子は持ち帰ること。

— 次の文章は、二宮正之『小林秀雄のこと』からの一節である。読んで問いに答えよ。

一九五九年に発表された「良心」は、嘘<sup>うそ</sup>発見機を主題にした文章だが、そのなかにこんなくだりがある。

考へるとは、合理的に考へる事だ。どうしてそんな馬鹿気た事が言ひたいかといふと、現代の合理主義的風潮に乗じて、物を考へる人々の考へ方を観察してゐると、どうやら、能率的に考へる事が、合理的に考へる事だと思ひ違ひしてゐるやうに思はれるからだ。当人は考へてゐる積<sup>つも</sup>りだが、実は考へる手間を省いてゐる。そんなコウケイ<sup>(1)</sup>が到<sup>いた</sup>る所に見える。物を考へるとは、物を摺<sup>つか</sup>んだら離さぬといふ事だ。画家が、モデルを摺<sup>つか</sup>んだら得心の行くまで離さぬといふのと同じ事だ。だから、考へれば考へるほどわからなくなるといふのも、物を合理的に究めようとする人には、極めて正常な事である。だが、これは、能率的に考へてゐる人には異常な事だらう。(『全集』12・五八)

一読したかぎりでは、簡単明瞭な文明批評の文章のようだが、よく見ると、豊かな内容の含まれていることがわかる。まず、「合理」という言葉であるが、これは僅か二行のあいだに肯定的な意味と否定の色合いとの両方に用いられている。最初の「考へるとは、合理的に考へる事だ」という部分では、勿論<sup>もちろん</sup>、積極的な意味を託されているが、次の行の「現代の合理主義的風潮」という表現になると、すでに否定の色を帯びている。しかもそれが、引用末尾の「物を合理的に究めようとする人」では、再び肯定的になる。ここで、「様々なる意匠」の冒頭の部分が思い出されるのだが、小林は、長い作家生活の当初から、言葉の両義性・多義性を認識しており、そこに言葉の魔術を見ていた。そこにこそ、言葉の命の源があるといふのであった(『全集』1・一一)。「合理」という分かりきつたような言葉も、小林においては、標本<sup>(ア)</sup>になつた蝶<sup>ちよ</sup>のように固定してはいないのである。従つて、この文章のなかで積極的な意味で用いられていると言つても、そのような明確な定義がくだされてゐるわけではない。そもそも、切り離した単語に定義を与えることは、小林的思考法とは異質なのである。そこで、合理的と能率的とは違ふ、とか、(合理的に)考

えれば考えるほどわからなくなるのがあたりまえだ、とかいう表現になる。積極的な意味付けとして、小林は「物を考へるとは、物を掴んだら離さぬといふ事だ」とも強調する。しかし、ものを掴むとか、画家がモデルを掴むとは、なにを意味するか。必ずしも自明のこととは言いがたいので、もうすこし、丁寧にみておこう。

その意味で、同じ「考へるヒント」中の「役者」(一九六〇)という文に面白い一節がある。合理的という言葉が、非常に卑近な話題のもとに、次のように使用されているのだ。芸術座でジヨウエン(2)されていた菊田一夫の大衆劇「がめつ(2)い奴(2)」を観た小林秀雄は、主役の三益愛子(2)だけが人気をさらう理由を解いて次のように述べる。

事実、この金貸しの婆(2)さんだけが、たつた一人の劇的人物なのである。何故かといふとこの人物だけが合理的に生きようとしてゐるからだ。逆説ではない。多くの人が劇的といふ言葉を誤解してゐる。でたらめな事と劇的な事とは違ふのだ。偶然事故を生むが、決して劇を生みはしない。この婆さんだけが人間らしい意識を持つてゐる。偶然は彼女をとりこにする事が出来ない。彼女は、金を溜めようと自身に誓ひ、その誓ひのとりことなつてゐる。彼女の性格が劇を生む。(『全集』

12・七六)

ここでは、知識人の思考方法という水位ではなく、いわゆる市井人の物欲に突き動かされた生き方がとりあげられており、「合理的に考えること」ではなく「合理的に生きること」が論じられているのだが、小林の場合、「生きる」と「考える」は人間の行為として基本的に一体をなしているのだから、同じ問題を扱っていると言つてよい。画家がモデルを掴んだら得心のいくまで離さないと言われてすぐには合点のいかない者も、欲の皮のつっぱった人間が金儲けを己(1)れに誓う話ならば、立ちどころにわかる。しかも、小林秀雄は、金銭欲にとらわれそのジユウソク(3)の意志と欲望とをもって生きる老婆だけが、たつたひとり「人間らしい意識を持つ」と高く評価するのである。

では、「人間らしい意識」とは何を意味するのか。この問いに対する答えの手掛かりは、文中にある「偶然」という言葉が示唆し

ている。人間らしい意識をもっているおかげで、この人物だけは「偶然」のとりこにならぬ、という。他の登場人物は「偶然」の出来事にホンロウ<sup>(4)</sup>されているというのに、この金貸し婆さんだけがそれを免れているのはなぜか。小林はその理由を「誓ひ」という言葉であらわす。要するに、人間が自分としての目標を定めてそれに忠実であろうとするということである。とすると、守銭奴の誓いも、根本的には、人間の意志の関与する余地のない「自然」と人間が作り出さなければ存在しない「歴史」との関係にゆきつく。つまり、自然の非情な合理性にたいする人間の関わり方、あえて言うなら、「自然の合理」に対する人間の態度決定の問題になる。この点に関する小林の見解は、「ドストエフスキイの生活」の序として書かれた「歴史について」(一九三八—三九)に意を尽くして展開されているが、敢えて要約すると、つぎのようにいうことができるだろう。自然界の因果律に従って生起する事象を支配する合理性は、人間には、どうにもとりつきやうのないものであるが、人間は、単に「自然」のうちにあるのではなく、言葉によって「歴史」をつくり「歴史」の中に生きていく。そうして人間は人間としての存在理由をもつことができる。それが、人間らしい意識をもつということであり、その存在理由を全うする方向にはたらく思考あるいは生き方を、ここで小林は「合理的」といつているのではないだろうか。

もう一步話をすすめるなら、こと人間的観点に立つかぎり、いわゆる科学的合理性に基づいてどこまでも見通し可能な因果関係を適用することは、人間にとって合理どころか、逆に「不合理」なのだ。このことを、小林秀雄は、これも「考へるヒント」中の「常識」という一文で、平たく見事に表現している。たとえば、ことの成り行きを先の先まで御存知の神様同士が、つまり客観的条件内における因果関係を完全に読み切る能力を持った者同士が、「人間の一種の無智を条件としてある」将棋という遊戯を指すことは、人間の理に合わない(『全集』12・二二)。先手必勝の将棋には何の意味もないのである。これが将棋のような遊戯ならばよいが、人生の最期の一瞬まで見通し済<sup>ずみ</sup>となつたらどうするのか。行き先を見通された人間が、いかに急速に人間でなくなるか、その見本は、シェイクスピアが『マクベス』で如実に描きだしている。

人間と自然の出会いところは、同時に「必然」であり「偶然」である。自然の因果律の節目節目は、単に自然現象としてみれば「必然」である。この必然を人間との出会いという観点からみて人間はそれを意識の側から偶然と呼びかえることもできるわけだ

が、それはそのまま小林秀雄のいう「人間らしい意識」の働きにはならない。

「がめつゝい奴」についての感想文は、だれにでもよく分かる金銭欲という卑近の例をもちいて、じつに大事なことを説いているのだ。偶然が偶然にとどまっているならば、そこには驚きはあつても、それを劇の要因に高めるエネルギーはない。偶然のとりこになつている人々は、わずかに、自然の一要素としての自分を意識しているに過ぎない。まさに吹けばとぶよな将棋の駒が右往左往しているだけの話である。これが「人間らしい意識」になるためには、偶然に驚くのではなく、逆に、これこそは自分に起こるべくして起こつた必然であるとして受け止め、そこに自分の「運命」を読み取り、それを全うする誓いをたてる必要がある。つまり、それを道徳の水位でひきうける必要がある。そのときに、ひとは「劇」の主人公になる。ある使命を引き受けた人間が、その使命達成との関連において、偶然を、「事故」としてではなく「事件」として、「出来事」として、認識する。そこにこそ、真の冒険としての「人生」の可能性があらわれる。<sup>(4)</sup>小林秀雄の特徴は、そのような生き方を、とくべつな英雄とかイジンとかの専有とせず、ひたすら金を溜めるといふいわば下賤な欲望の追求にまで認め、しかも、「がめつゝい奴」の場合のように、それこそを積極的に人間として「合理的に生きる」とみなすところにある。金貸しの老婆も、誓いの強度によっては、ギリシヤ悲劇の主人公と同等の生の質に達しうる。これは決して大袈裟<sup>おおげさ</sup>なはなしではないのである。

(二宮正之『小林秀雄のこと』による)

(注) ○全集——『新訂 小林秀雄全集』(新潮社、一九七八—一九七九)。巻数を算用数字、頁<sup>ページ</sup>数を漢数字で示している。

問(一) 傍線の箇所(1)(2)(3)(4)(5)の片仮名を適切な漢字に書き改めよ。

問(二) 傍線の箇所(ア)「標本になつた蝶」とはどのようなことをたとえているか。本文の内容に即して二十五字以内で説明せよ。

問(三) 傍線の箇所(イ)「欲の皮のつっぱつた人間が金儲けを己れに誓う」とはどのようなことか。本文の内容に即して三十字以内で説明せよ。

問(四) 傍線の箇所(ウ)に「先手必勝の将棋には何の意味もない」とあるが、このたとえによって筆者はどのようなことを言おうとしているか。たとえの内容を明確にしなから六十字以内で説明せよ。

問(五) 筆者は傍線の箇所(エ)「小林秀雄の特徴は」から始まる一文を「それを積極的に人間として『合理的に生きること』とみなすところにある」とまとめている。ここに言う『合理的に生きること』を、筆者はどのようなことと捉えているか。本文全体の内容を踏まえて九十字以内で説明せよ。

二 次の文章は、カフェの開業を決意した主人公珊瑚が、「物件」を見に行く場面が始まる一節である。読んで問いに答えよ。

立花夫妻は、子連れで現れた。

家のことや敷地のことを、一度、現場で説明しよう、と立花義也よしやから連絡が来たので、珊瑚も少し緊張して、定休日、くららに雪を預けて「現場」へやってきたのだった。すると、前回閉まっていた門が大きく開いていて、そこに白いセダンが一台、停とまっていた。車種に疎い珊瑚には、どういう車なのか分からなかったが、そこからは何か、「平均的な幸福」といったものが漂たっているように思えた。主張がなく、威嚇がなく、敵意を感じさせない。これがいわゆる、ファミリーカーというもののなのだらう、と、おおいに感心した。その「感心」には嫌みが混じっている、とすぐに気づく。そういうふうに自分が反応するのは、「平均的な幸福」から、遥はるかに遠いところにいる、という自覚からくる僻ひがみなのかもしれない、情けないことだが、と我に返って頭を振り、一旦その「僻ひがみ」を吹き飛ばし、車の横を抜け、「物件」へと向かった。

「物件」は、すっかり雨戸が開けられ、二階を含め、窓も開け放たれていた。家の中に、誰かいる気配があった。近づくと、色白で童顔の男性が中から出てきて、

「珊瑚さん？」

「はい。初めまして」

「初めまして、立花です」

二人で頭を下げ合っていると、奥から、

「いらしたの？」

と、声が出て、これもまた色白で愛らしい童顔の女性が、

「あなたが珊瑚さん。お噂うわさは聞いています」

にこここしながら、さっと片手を差し出し、握手を求めた。珊瑚はちょっと面食らったが、おずおずとそれに応じた。

「妻の恵けです。で、これが」

奥から、小さい男の子が走り寄ってきたかと思うと、立花の足にしがみついた。

「長男の、カイト、です。もうすぐ二歳」

カイトと呼ばれた男の子は、珊瑚の方を見ながら、立花に手を伸ばす。

「カイトくん。どんな字を書くんですか」

立花は、カイトを抱き上げ、

「海の人、って書いてカイト」

「ああ。海人。すてきな名前」

「海の日に生まれたってだけで……珊瑚さんも、お子さんいらっしやるんでしょ。連れてこられるかと思って、うちも」

「ああ、でも、遊び相手には無理かもしれません。まだ八カ月ですから」

「お名前は」

「雪っていうんです。空から降ってくる……」

「すてきじゃないですか」

「雪の日に生まれたってだけで」

そこで皆で笑った。海の日に生まれた海人は、きよんとしている。

「どうぞ上がってください。そろそろ窓も閉めて、暖かくしましょう。電気ストーブを持ってきたんです」

恵はそう言つて、奥へ入り、硝子戸ガラスを閉め始めた。珊瑚も上がつてそれを手伝う。義也は二階へ向かった。

「すてきなご家族だったんです。奥さんの恵さんとても優しくしてくださつて……。彼女が義也さんを説得して、結局家賃

を十五万にしてくださいましたんです」

「え、それはすごい。よかったですじゃないですか」

くからは無邪気に喜んでみせたが、

「そうなんです」

珊瑚の顔は浮かない。

「何かあったんですか？」

くからの問いかけに、珊瑚はしばらく一点を見つめて黙っていたが、

「……嫉妬しつとだと思っんです、結局は」

「あら」

くからは面白がっているような顔をした。

「どうしてそう思うの」

「……ええ」

ええ、と言ったのは、別に何かを肯定したからではなく、ただ、自分の次の言葉への呼び水(2)として発したに過ぎなかったのだが、それでも珊瑚はまだ考えている。くからは珊瑚が語り出すのを待っている。珊瑚は、ようやく、

「……たぶん、彼らは、海人君が熱を出せば、二人で心配し、相談して考える。チームとして、動ける。週末になれば、今日のように三人でどこかに出かける。日曜日の公園。笑顔と歓声。たぶん、恵さん自身、何の屈託もなくそういうものの中で育った。そして、自分とはかけ離れた、一人で赤ん坊を育て、生活のために開業しようとしている女の話を聞いた。心から同情した。自分にできることはないか、と考えた。そして、その女が少しでも楽になるように、家賃を安くするよう夫に働きかけた」  
くからは静かに微笑ほほえんでいる。そして、

「そうね、まちがいなく、そんなところでしょう。それがどうしていけないの」

珊瑚は、黙っている。

「施し、みたいに感じますか？」

くらの言葉に、珊瑚は大きくため息をついた。

「そういうことなんだと思います」

「そう？ 私には、彼女の、あなたに対する尊敬もあると思うけど」

珊瑚は激しく首を振る。

「同情です、まちがいなく。私が、雪と二人で生きていく、それだけのことですが、人の同情を呼ぶ。そのことに、うすうすは気づいていました。くららさんだって、本当のところ、そうだったんではないですか。時生ときおさんたちだって。いえ、そのことを、決して責めてるんじゃないんです。ものすごく、ありがたいことだと思ってるんです、本当に。ただ、なんというか……。そういうことに頼って生きていくような自分が嫌なんです」

それだけ言うと、俯うつむき、両手を合わせて額を支えた。くららはしばらく黙って珊瑚を見つめていたが、

「今までは、でも、そういうことにそれほど、なんというか、アレルギー反応みたいなのは出なかつたでしょう。今日、『恵さんの優しさ』で、一気にそれが意識の表に出てきてしまった、ということなのかしら」

「……たぶん」

アレルギー反応、っていう言葉はぴつたりかもしれない、と珊瑚は心の中で思った。

くららは、そう、とうなずき、

「なんでも外国の例を持ち出すのが馬鹿げているということは分かっているけれど、自分たちの文化や感じ方がすべてなんだって、思い込まないですむようにするためには、いろんな人たちがいることを知るのには、役に立つと思うの」

と、低く優しい声で話し始めた。

『若草物語』に、クリスマスの朝、四姉妹が楽しみにしていたごちそうを、母親に言われてそのまま、町の貧しい人たちに

持つていくところがあるでしょう。あの四姉妹は、ずっと楽しみにしていたことだけに、残念でならないと思つてもいるけれど、清々すがすがしい思いもする。欧米の国々の中にはね、自分たちがいつも施す側だと思つているところが多かつた。やらなければならぬという義務感だけで黙々とやつてきたにしても、正しいことをやっているとこの気持ちのよさがあることは否めない。自分たちが自己犠牲を払うことによつて他者が喜ぶ、それを自分の喜びとすることで気持ちよくなるのか、優越欲求が満たされて、気持ちよくなるのか、或いはその両者は同じ一つのものなのか、その辺りが、意識されないのでずっとやつてきた。そこはともややこしいところだから、今は、手をつけないでおきましょう。問題は、人類が生まれてから、ずっと、ありがとうございませす、とお礼を言いつつ施される側にあつた人々のことです。感じていたのは感謝だけとは思えない。ごく稀まれにはそれだけのこともあるだろうけれど、大かたは、六割の感謝、二割の屈辱感、二割の反感、みたいなものだらうと思ひます。けれど、それでも生きていかなければいけない、という現実が、彼らに頭を下げさせる。『施す側』の中の、センスのいい人々は、なんとなくそれを感じ取つて、彼らに卑屈さを感じさせまいと余計に丁寧ていねいに接する、そうするとそのことがまた、彼らの屈辱感を倍加ばいさせる……」

(4) くからはため息をついた。この辺りのことは、どうやら彼女の修道女としての海外活動で通つてきた葛藤かつとうであるらしかつた。

「けれど、施す側もいろいろだけれど、施される側もいろいろです。施されてやつてるんだ、おまえたちに善行をさせてやつてるんだ、とばかり、貫きつてやるという態度の人もある。礼も何も言わず、当然の権利のようにもつともつとと要求してくる人たちもいる。それほどではなくても、施される、ということとは、そのままプライドまで差し出さなければならぬ、ということでは全然ないのよ。なんというか、一番その人のプライドが試される、重要な瞬間なんです。もつとも、その前に、私は珊瑚さんが今、『施されてる』状態では全然ないと思つてるけど。もしあなたが、立花さんが家賃を十五万円に値引きしたつてことに、そう感じているのなら……」

珊瑚はその言葉をさへぎり、

「プライドが試される、重要な瞬間つていうのは？」

くからは、そうね、と言って、何かを思い出そうとし、ゆっくりと、

「私が昔、ローマに赴任していたとき、貧しい人たちの住む地域に、寄付された服や食糧を定期的に運んでいたことがあったの」

「ああ、修道院の活動で？」

「そう。そこにいた、一人暮らしのおばあさん、ジュリアーナ。私が持っていくものを、まるで蓄薇<sup>ぼら</sup>の花束を受け取るように、にっこりと、優雅に、両手をこう、振り絞って……」

と、くからは両手を胸の前で握りしめ、目をつむって微笑みながら首を振って見せた。

「まあ、ありがとう、って受け取るの、毎回、毎回。それはやり過ぎたらかえって嫌みになって相手への攻撃になるような、微妙なラインなの。彼女はその辺を、完璧<sup>かんぺき</sup>に心得ていた。私は、いつも、自分が極上のプレゼントを差し上げたような気持ちにさせてもらったものです。それは、ジュリアーナの、私へのねざら<sup>3</sup>いだったの。ジュリアーナは、地方の領主の家柄の出身だったんです。私が彼女のプライドを氣遣っていることが、分かっていたのね。ちよつとやそつと、『施された』くらいで、ジュリアーナのプライドはびくともしないのよ。私を氣持ちよくさせることが、彼女の『施し』だったのかもしれない」

珊瑚は苦笑した。

「プライドの鍛え方が違うのかもしれませんが」

「そうね。珊瑚さんはもつと鍛える必要があるかもしれませんがね」

そこで二人で少し笑った。くからは、

「聖フランシスコの言葉に、施しはする方もそれを受ける方も幸いである、というのがありますが、ジュリアーナの文化的な背景にそういう認識があったかもしれない。確かに、私には珊瑚さんと雪ちゃんの役に立てれば、という氣持ちがあります。それを同情と呼ぶかどうかは別にして。珊瑚さんは、同情を引くのがいや、と言っているけれど、たとえば、あなたの好きな石原吉郎<sup>よしろう</sup>がいたシベリアの抑留地で、彼らはそんなことを言っていられなかしら。彼らの中の誰かが、ソ連側の誰かの同情を引いて銃殺を免れたとか、パンを一個余計に貰って餓死を免れたとしたら、その『同情を引く力』は、その人が生きるための武器になっ

たのではないかしら」

「……生きるための武器」

くらはは、うなずいた。珊瑚は、

「そんなものを、武器にして生きるなんて悲しい。でも、それが私の現実なんだって、だんだん、分かってきました」

そして、傷ついた後のような笑顔を見せた。くらははその笑顔を痛々しく見遣<sup>みや</sup>って、

「その、恵さんだって、私は同情と呼ぶより、珊瑚さんに対する好意だったんだと思いますよ」

「ええ。私も彼女が好きです。だから、いろいろ考えて、これは私の彼女に対する嫉妬なんだって、思ったんです。私にないものを持つているからって、反感を持つのは、それはやっぱり、私がおかしい」

「おかしうなんかないですよ。自然な感情ですよ。でも、彼女に反感を抱くことを、そういうふう意識できれば、しめたものですよ」

「しめたものですか」

「そう、しめたもの」

ふふふ、と二人で笑う。

珊瑚さんにはね、なんというか、こちらが思わず応援したくなるようなところがあるんです。だからね、それを利用すればいいのよ……。

別れ際、くらははそう言ったが、珊瑚は、そんなものを「利用」する気になんかなれない、と思った。なんというか、人の好意を利用するなんて、そういうことは、「薄汚い」、と思う。けれどそれは、まだまだ「プライドの鍛え方」が足りないということなのだろうか。そんなことにいちいち反応するのは、なまっちよろい「プライド」の証拠で、母子家庭でなりふりかまわず働かないといけない立場としては、もっとプライドを鍛え、ちよつとやそつとでは傷つかない鎧<sup>よろい</sup>のようなものにし、当然のような顔を

して人の好意を渡り歩いて行くべきなのだろうか。

自分にそれができるかどうか、しばらく考える。

(エ) やっぱり、葛藤なしにはできない、と思う。

バギーを止め、中で寝ている雪を見つめる。

網渡りのような人生だけれど、やれるところまでこれでやってみるしかない。あんたは、そういう母親といっしょに生きるんだ。

(梨木香歩『雪と珊瑚と』による)

(注) ○時生——くらの甥おひが開いたオーガニック農場の共同経営者。

○石原吉郎——シベリア抑留の経験をもつ詩人(一九一五—一九七七)。

問(一) 傍線の箇所(1)(2)(3)の意味を文脈に即して簡潔に記せ。

問(二) 傍線の箇所(ア)に「アレルギー反応、っていう言葉はびったりかもしれない、と珊瑚は心の中で思った」とあるが、「アレルギー反応」とはどういうことか。本文の内容に即して三十五字以内で説明せよ。

問(三) 傍線の箇所(イ)に「くらははため息をついた」とあるが、それはなぜか。本文の内容に即して六十字以内で説明せよ。

問(四) 傍線の箇所(ウ)に「でも、彼女に反感を抱くことを、そういうふうを意識できれば、しめたものですよ」とあるが、くらははなぜ「しめたものですよ」と珊瑚に伝えたのか。本文の内容に即して四十五字以内で説明せよ。

問(五) 傍線の箇所(エ)「やっぱり、葛藤なしにはできない、と思う」には、珊瑚のどのような気持ちが表れているか。本文全体の内容を踏まえて七十五字以内で説明せよ。

三

関東で威を振るう平将門の討伐を命じられた俵藤太秀郷は一計を案じて、将門に取り入り、その館に滞在している。そこで小宰相と恋仲になつてゐる。文章を読んで問いに答えよ。

さるほどに、平親王将門、常にこの女房のよそほひ御覧じて、御心に染みておぼしければ、時々はこの御局へ通はせ給ふが、折節親王この局におはしける時、秀郷参り合ふたり。怪しく思うて、物の隙間より窺ひ見れば、同じ男体の上藤束帯にて、七人ひとしく座し給ふ。こは不思議のことかなと思つて、その夜は帰りけり。明けの夜また御局へ参りて、様々に睦まじきことども言ひ交はして後、藤太「さても過ぎし夜、この御局に人音のしけるを、誰人やらんとさし寄りて物の隙より見てあれば、さしも氣高き上藤のおはしまして候ふは誰人やらん」と問はれければ、小宰相「それこそ将門の君にておはしませ。見まがひ給ふにや」とのたまへば、藤太重ねて申すやう、「殿ならば、ただ御一人こそおはすべけれ。同じ帯佩の上藤七人まみえおはしつるこそ不思議なれ」と申す時に、小宰相「さてははまだ知らしめさずや。殿は世の常に超え、御かたちは一人なれども、御影の六体まします故に、人目には七人に見え給ふなり」。藤太奇異の思ひをなし、「さて御本体には御見知りの候ふや」と問はれて、女房「夢現人に語らぬことなれども、御身なれば申すなり。うはの空におぼしめし、他人に漏らし給ふなよ。かの将門は御かたち七人にて、御振舞變ることなしといへども、本体には、日に向ふ、灯火に向ふ時、御影うつり給ふ。六体には影なし。さてまた御身体(1) 悉く黄金なりといへども、御耳のそばにこめかみといふ所こそ肉身なり」と語らせ給へば、藤太よくよく聞きて、「あつばれ、大事をも聞きつるものかな。これこそ誠にわが生国の大明神御託宣にてあるべし」と、いと有難くて、そなたの方に向かつて祈念の気色(1) をしたりけり。

さてはこのたび、将門をただ一矢に射伏せんことは、案の内と思ひとり、その後は夜な夜な、かの御局へ参るには、ひそかに弓と矢を脇(2) ばさみ、忍び窺ひけり。案のごとく、また将門かの御局へ入らせ給うて、うちとけて御物語などし給へり。藤太、物の隙よりよくよく見れば、げにも六人には、灯火にうつる影もなし。本体には影のありと言ふについて、目を澄まし見れば、時々かのこめかみといふ所動きけり。藤太、あつばれ幸ひかなと、弓と矢をうち番(3) ひ、ひやうど射たりけり。もとより秀郷は精

兵の手だれ、養由が百歩の芸にも超えたる上、矢頃は間近し。何かはもつて射損すべき。小耳の根と思ふ所を彼方へづんど射通しければ、さしにも猛き将門も、のつげに倒れて空しくなれば、残る六人のかたちも電光石火のごとくにて、光と共に失せにけり。

さるほどに将門滅びぬれば、貞盛、秀郷は喜びの眉を開き、討ち取るころの首、ならびに生捕どもを召し連れ、ざざめかいて上らるる威勢のほどこそゆゆしけれ。道遠ければ、王城へは誠の左右はいまだ聞えず。官軍は戦にはうち負け、将門はすでに帝都へ攻め入るなど聞えければ、主上大きに驚かせ給ひつつ、諸寺諸山に勅使立て、調伏の法をしきりに行ふべき由、宣下せらるる。中にも八坂の浄蔵貴所は「今度将門が攻め上るといふことは、全くもつて虚言なるべし。もしさなくは法験いたづらごととなるべし。ただしかの首の上り候ふにや」と勅答申されけるが、果して四月二十五日、貞盛、秀郷の兩人、将門の首を持ちて上洛せられけり。これによつて、君も御物思ひを休められ、臣も喜び勇みつつ、一天四海の人民安堵の思ひをなしたりけり。

(『倭藤太物語』による)

(注) ○この女房——小宰相のこと。 ○上臈——身分の高貴な人。 ○帯佩——容貌・服装などの様子。

○わが生国の大明神——近江国の新羅大明神のこと。

○養由が百歩の芸——中国楚の国の弓の名人養由基が、百歩離れて柳の葉を射たところ百発百中であつたということ。

○貞盛——平貞盛。貞盛も将門討伐を命じられていた。 ○ざざめかいて——騒ぎたてて。

○主上——天皇。 ○八坂の浄蔵貴所——京都八坂寺の僧。「貴所」は尊称。

問(一) 傍線の箇所(1)(2)の語の意味を記せ。

問(二) 傍線の箇所(ア)「それこそ将門の君にておはしませ。見まがひ給ふにや」を口語訳せよ。

- 問(三) 傍線の箇所(イ)に「大事をも聞きつるものかな」とあるが、この「大事」とはどのようなことか。四十字以内で説明せよ。
- 問(四) 傍線の箇所(ウ)に「あつばれ幸ひかな」とあるが、なぜこのように思ったのか。四十字以内で説明せよ。
- 問(五) 傍線の箇所(エ)に「君も御物思ひを休められ」とあるが、なぜこのような気持ちになったのか。五十字以内で説明せよ。

四

次の文章を読んで問いに答えよ。なお、設問の都合上、一部訓点を省いたところがある。

会稽多<sup>ニ</sup>蘭、而<sup>ク</sup>閩産者貴<sup>シ</sup>。養<sup>フ</sup>之<sup>ヲ</sup>之法<sup>ハ</sup>、喜<sup>ブ</sup>潤<sup>ラ</sup>而<sup>シ</sup>忌<sup>ミ</sup>湿<sup>ヲ</sup>、喜<sup>ブ</sup>燥<sup>ラ</sup>而<sup>シ</sup>畏<sup>レ</sup>日<sup>ヲ</sup>、喜<sup>ブ</sup>

風<sup>ヲ</sup>而<sup>シ</sup>避<sup>ク</sup>寒<sup>ヲ</sup>、如<sup>シ</sup>富家<sup>ノ</sup>嬌<sup>ケウ</sup>小兒<sup>ノ</sup>女<sup>ノ</sup>、特<sup>ニ</sup>多<sup>ナル</sup>態<sup>ナル</sup>。難<sup>ク</sup>奉<sup>フ</sup>。予<sup>ハ</sup>旧<sup>シ</sup>嘗<sup>テ</sup>聞<sup>ク</sup>之<sup>ヲ</sup>。曰<sup>ク</sup>

「他<sup>ハ</sup>花<sup>ハ</sup>皆<sup>ク</sup>嗜<sup>シ</sup>穢<sup>ヲ</sup>而<sup>シ</sup>漑<sup>セ</sup>、閩<sup>ノ</sup>蘭<sup>ノ</sup>独<sup>リ</sup>用<sup>フ</sup>茗<sup>ノ</sup>汁<sup>ニ</sup>」以<sup>テ</sup>為<sup>ス</sup>草<sup>ノ</sup>樹<sup>ノ</sup>香<sup>リ</sup>清<sup>キ</sup>者<sup>ハ</sup>、無<sup>ク</sup>如<sup>ク</sup>

蘭<sup>ニ</sup>、味<sup>ノ</sup>清<sup>キ</sup>者<sup>ハ</sup>、無<sup>シ</sup>如<sup>ク</sup>茗<sup>ノ</sup>。氣<sup>ノ</sup>類<sup>、</sup>相<sup>ヒ</sup>合<sup>ス</sup>宜<sup>ト</sup>也。休<sup>ム</sup>園<sup>中</sup>、有<sup>リ</sup>蘭<sup>二</sup>盆<sup>、</sup>漑<sup>グ</sup>之<sup>ニ</sup>

如<sup>ク</sup>法<sup>ノ</sup>。然<sup>レドモ</sup>葉<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>短<sup>カク</sup>、色<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>瘁<sup>ヤミ</sup>、無<sup>ク</sup>何<sup>レ</sup>其<sup>ノ</sup>一<sup>カ</sup>槁<sup>カ</sup>矣。而<sup>ル</sup>他<sup>ノ</sup>家<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>植<sup>ウ</sup>者<sup>ハ</sup>、茂<sup>リ</sup>而

多<sup>シ</sup>花<sup>。</sup>予<sup>ハ</sup>就<sup>キテ</sup>問<sup>フ</sup>故<sup>、</sup>且<sup>ツ</sup>告<sup>グ</sup>以<sup>テ</sup>聞<sup>ク</sup>。客<sup>ハ</sup>嘆<sup>ジテ</sup>曰<sup>ク</sup>、「誤<sup>レル</sup>哉、子<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>術<sup>也</sup>。夫<sup>ハ</sup>以<sup>テ</sup>

甘<sup>キ</sup>食<sup>ヲ</sup>人<sup>者</sup>、百<sup>ノ</sup>穀<sup>也</sup>。以<sup>テ</sup>芳<sup>ク</sup>悦<sup>レ</sup>人<sup>者</sup>、百<sup>ノ</sup>卉<sup>也</sup>。其<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>謂<sup>フ</sup>甘<sup>キ</sup>与<sup>レ</sup>芳<sup>シキ</sup>

子<sup>ハ</sup>識<sup>ル</sup>之<sup>ヲ</sup>乎<sup>。</sup>臭<sup>ニ</sup>腐<sup>之</sup>極<sup>ニ</sup>、復<sup>タ</sup>為<sup>ル</sup>神<sup>奇</sup>。物<sup>ハ</sup>皆<sup>ク</sup>然<sup>リ</sup>矣。昔<sup>ハ</sup>人<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>捕<sup>ヘ</sup>得<sup>ル</sup>龜<sup>者</sup>曰<sup>ク</sup>

『龜<sup>ハ</sup>之<sup>ノ</sup>靈<sup>ナレバ</sup>不<sup>レ</sup>食<sup>ラ</sup>也。篋<sup>ハ</sup>藏<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>、旬<sup>ニ</sup>而<sup>シテ</sup>啓<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>、龜<sup>ハ</sup>已<sup>テ</sup>饑<sup>ス</sup>死<sup>スト</sup>』由<sup>テ</sup>此<sup>ノ</sup>言<sup>フ</sup>之<sup>ヲ</sup>、

凡<sup>ソ</sup>謂<sup>フ</sup>物<sup>ハ</sup>之<sup>ル</sup>有<sup>ル</sup>不<sup>レ</sup>食<sup>ハ</sup>者<sup>ヲ</sup>与<sup>ラ</sup>草<sup>ノ</sup>木<sup>ノ</sup>之<sup>ル</sup>有<sup>ル</sup>不<sup>レ</sup>嗜<sup>マ</sup>穢<sup>ヲ</sup>者<sup>甲</sup>、皆<sup>ハ</sup>妄<sup>也</sup>。子固而溺所<sup>(ウ)</sup>  
 聞<sup>ル</sup>。子之蘭<sup>ル</sup>槁<sup>ル</sup>亦<sup>タ</sup>後<sup>ナリト</sup>矣。予既<sup>ニ</sup>帰<sup>ル</sup>、不<sup>レ</sup>懌<sup>ホ</sup>、猶<sup>ホ</sup>謂<sup>ハ</sup>聞<sup>ク</sup>之<sup>ル</sup>不<sup>レ</sup>妄<sup>ナラ</sup>、術<sup>ノ</sup>之<sup>ル</sup>不<sup>レ</sup>  
 謬<sup>ビウナラ</sup>。既<sup>ニ</sup>而<sup>ヒテ</sup>疑<sup>ク</sup>曰、「物固<sup>ニ</sup>有<sup>リト</sup>久<sup>シクシテ</sup>而易<sup>カヘ</sup>其<sup>ノ</sup>嗜<sup>ミヲ</sup>、喪<sup>ウシ</sup>其<sup>ノ</sup>故<sup>ヲ</sup>、密<sup>ヒ</sup>化<sup>シテ</sup>而<sup>ル</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>カ</sup>知<sup>ル</sup>者<sup>上</sup>。」離騷曰、「蘭・芷<sup>シ</sup>變<sup>ジテ</sup>而<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>芳<sup>シカラ</sup>兮、荃<sup>セン</sup>・蕙<sup>ケイ</sup>化<sup>シテ</sup>而<sup>ル</sup>為<sup>レ</sup>茅<sup>カヤト</sup>。」夫其脆<sup>ゼイ</sup>弱<sup>ノ</sup>・  
 驕<sup>ケウ</sup>蹇<sup>ケン</sup>、銜<sup>テ</sup>芳<sup>シキヲ</sup>以<sup>テ</sup>自<sup>ラ</sup>貴<sup>シトス</sup>。余固<sup>ヨリ</sup>以<sup>テ</sup>憂<sup>フ</sup>其<sup>ノ</sup>難<sup>キ</sup>養<sup>ヒ</sup>、而<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>虞<sup>ル</sup>其<sup>ノ</sup>易<sup>キ</sup>變<sup>ジ</sup>也。嗟<sup>ア</sup>  
 夫。於<sup>テ</sup>是<sup>ニ</sup>使<sup>ム</sup>童子<sup>ヲ</sup>剔<sup>キ</sup>槁<sup>ル</sup>、沃<sup>ソ</sup>枯<sup>ル</sup>、運<sup>メ</sup>糞<sup>ヲ</sup>而<sup>レ</sup>漬<sup>ケ</sup>之<sup>ヲ</sup>、遂<sup>ニ</sup>盛<sup>ン</sup>ナリ

(陶望齡「養蘭説」による)

(注)

○会稽——地名。浙江省紹興市一帯の別称。

○閩——地名。福建省一帯。

○嬌——愛らしい。

○多態——容姿が美しい。

○茗汁——飲料用の茶。

○休園——陶望齡の庭園。

○臭腐之極、復為神奇——『莊子』知北遊篇の文章に基づく表現。

○龜之靈不食也——龜は靈なる生き物で物を食べないという考え方が当時存在した。

○離騷——『楚辭』の一篇。

○蘭・芷、荃・蕙——いずれも香草の一種。

○驕蹇——「驕」は、おごり高ぶること。「蹇」は、かたくななこと。

問(一) 傍線の箇所(1)「難奉」、(2)「問故」の意味を記せ。

問(二) 傍線の箇所(3)「由此言之」を、すべて平仮名で書き下せ。現代仮名づかいでよい。

問(三) 傍線の箇所(ア)に「気類、相合宜也」とあるが、筆者はどのようなことについて「合宜」と考えたのか。本文の内容に即して二十五字以内で記せ。

問(四) 傍線の箇所(イ)「臭腐之極、復為神奇」の「臭腐」、「神奇」はそれぞれ何を指すか。「客」の言葉に見られる語を用いて答えよ。

問(五) 傍線の箇所(ウ)に「子固而溺所聞」とあるが、「客」は「子」に対してどのようなことを言っているのか。本文の内容に即して簡潔に説明せよ。

問(六) 蘭の栽培法に対する筆者の認識について、本文全体を踏まえ、筆者の行動の推移が分かるように七十五字以内で説明せよ。